

遠山 啓著

かげがえのないこの自分

太郎次郎社

1,500円

日本人はこのまあいったら、精神的に無気力でだめな民族になってしまうかもしれない。(まえがき) 遠山啓が20年前に警告している。

そんな遠山啓が、悩む所をまちがっていないと、12人(12章)の人達に語りかける。それを読んでる者たちも『啓の世界』に入っていく。そんな感じがこちよかった。

手紙による悩み・質問に、面と向かって返信する。その内容に、現状のせちがらさをわすれさせてくれると同時に、何を指針に生きていくかを与えてくれる。

- (1) 兄弟姉妹は優等生、自分一人がダメな人です。一流大学へ、そして官庁への道はぼくにはとれない。
- (2) 夫をなくし、母子家庭の中での子育て。父親の役割、母親の役割はどうあるのでしょうか。
- (3) 自信を失った教師は、何かやりきれない自分を見る。生徒の自殺に遇って、これから何をどのようにに悩んでいます。
- (4) 退職校長の挑戦状、「競争なくして教育が成り立つのですか？」に。

- (5) 研究者か教育者か、進路を選びかねる大学生は、創造的でない教育の仕事を選ぶのはどうだろうかと悩む。
- (6) 学校のあり方に疑問を持つ高校生は、もっと素晴らしい学校をさがす。
- (7) 五段階評価はどうして決まっているのかの疑問を持ったお母さんは、「なんでそんな数字で未来を決めるのか」と叫ぶ。
- (8) 高校受験に向かう中学教師は、本来の教育ができないとなげく。
- (9) 世の中に出ようとしていない子を持つ母親は、子どもに何を与えるべきか。
- (10) 障害者に立ち向かう高校生は、まわりの対応のひややかさに悩む。
- (11) 大学の先生が塾を始めた。教育は学校だけの専売じゃないよ。
- (12) なぜ数学を学ぶのかと疑問を持った高校生は、啓に聞く。
12の一見して難解な問題に実にはっきりと答えていく。時には立ち止まり、時には賛同し、時には、激しく相手をうちくずしていく。
ほんとうに楽しい本でした。
啓という人の思いが15年たった今でも手にとるように伝わってきます。

(加藤 久和)

数学教育協議会／小沢健一(編)

「数学教室」別冊④

電卓なるほど活用術

国土社

各1,800円

「電卓片手に楽しんで」というくまえがきに誘われて、出てくる計算法を1つずつ試しながら読んでみました。

パソコンを「すっぱい葡萄」のように眺めていた私は、野崎昭弘先生の「このような『実験』を楽しんでいる間に、情報処理の基礎を学び、大型コンピューターではつかみにくい『コンピューターのメンタル・イメージ』を育てることが期待できる」という文章に、期待したからでもあります。

西山豊先生が「電卓を電卓として認める」ためにと出された〈サバイバル数〉を見つめる問題に挑戦してみました。でも、くたびれて、途中で文末の解答を見てしまいました。人数を多くして手分けすれば面白いと思いました。

和田常雄先生の小学6年での実践で、循環小数の世界の面白さを学んだ後で、銀林浩先生の「8桁電卓」で循環節 $e=9$ 以上の循環小数を計算する方法を知り、 $1/97$ ($e=98$) について、電卓と手計算の両方でやってみました。当然のことなのに、一

致したときは思わず快哉!?

岩村繁夫先生の小学4年生の実践では、小学生でもこんなにたくさん電卓を使えるのかとビックリ。「電卓がおもちゃみたいで楽しかった」という子どもの感想がなにより光っていました。

井出賀津雄先生の小学校高学年と中学校での電卓活用教材と小寺隆幸先生の中学校の授業は、どれもが電卓がなければとてもうまくいきそうにないもので、しかも、すべて実践に裏付けられていて、明日の授業にすぐ使えるものばかりです。

徳田紀子先生の「指数関数」の授業プリントと黒田俊郎先生の「三角比」の授業も、ともに、1つの教材の展開の中で、どのように「関数電卓」を活用するかを示したもので、「電卓を敬遠しているのは、教員」というのは正しいようですね。

吉田一先生の「電卓雑誌」と何森仁先生の「電卓いろいろ」では、「変わった電卓」や「教育用電卓」がいろいろ紹介されている。お2人とも電卓マニア?

「執筆者は、その方面の専門家や先駆者ぞろいです。電卓片手に楽しんでいただくとともに、新しい時代の数学教育に思いを馳せ」(まえがき) することができた本でした。

(榊 忠男)